

もの、永久不變の實在である。宇宙過程と人間進歩の究竟的目的となれる凡ての價值理想の源泉である。と、神の絶對性と實在性と共に及んで筆を止めてゐる。

以上の内容は諸種の學說を批判的に序列し、著者自らは批判的組織法といつてゐるが、まだくゞ残されたる問題も多いであらうし、論述すべき點も少くないのである。引用する學說多きに比して、宗教哲學的に解説したるものと比べて、宗教哲學を組織し得たとは感ぜられないのである。然し、譯文の文致は平易によく整ひ、加ふるに細かく索引を附備してある。蓋し宗教哲學の概説としては格好のものといへやう。

(紹介者 阿部現亮) (理想社出版部)

## フツセルの現象學

高橋里美著

現代の哲學界の寵兒とも言ふべき現象學の創始者フツセルの現象學を簡明に手きはよく、然も要點を巧に捉へて紹介せんと企てられたのが本書の目的である。

著者は現象學について深く研鑽を積まれた學者であるのみならず、一九二六年の秋から翌年の夏へかけてフライブルク大學で親しくフツセル教授の下で講義を聴かれた。それらの遺語に加ふるにその後のフツセルの論文や著述を參考して非常に廣汎な研究から、フツセルの現象學について凡そ四篇の論文にまとめてある。

第一の「フツセルの現象學、特に其の現象學的還元について」は本書の中で最も主たるものであり、最も組織的な論述であつてフツセルの現象學を紹介したものである。特に現象學的還元を主

なる觀點としてあり、フツセルの現象學全般の紹介を試みたものでないが力作であるから、讀者の參考となることが多いであらう。第二の「批判論と現象學」第三の「分析と綜合」は第一と相補足すべきものであり、第四に「フツセルの事」と題するのは印象記である。終に附けてある註は讀者をして、更に深き研究に導く暗示力に富んでゐる。

各論文がもと雜誌に掲げられたのを、本書の爲に集められたので、本書全體として、組織的な記述とは言へないが、初學者に現象學を正しく理解せしめる上に益する所が大であらう。終に臨んで將來フツセルの現象學に付き、高橋教授が組織的な著作を發表せられんことを切望する。(紹介者 高橋俊乘)

## 引得 第一號 說苑引得

古來東洋の圖書には索引(引得)の編纂されてゐない爲、後進の者をして如何ばかり不便を感ぜしめたか分らぬ。最近になつて新進の學者にして古典の名著に索引を編纂する人々の現れたのは慶賀すべきことである。本書もその一であつて、燕京大學の圖書館で洪業氏を主任として編纂されたものである。

由來漢字は歐洲語や國語の假名と違つて、排列が頗る困難である。恐らく完全な排列は出来ないかも知れない。本書は皮擲の法と稱し、言はゞ字形と筆順によつて、歐洲語の字母順の如く、一の漢字を多くの部位に區分し、その區分に一定の順位を設け、一種のアルファベチーションを考案して、前漢詞向の著「說苑」の要語を排列し、四部叢刊本の丁數づけによつて索引を編修した

ものである。しかし四部叢刊本以外の「說苑」を讀まんとする人の爲に、四部叢刊本と他の十四種の刊本との丁數の比較表をも副へてある。

漢字の索引は字形のみでは不十分であつて、字音の索引を必要とする場合も少くないから、羅馬字で示した發音をアルファベツト順に索引を設けて發音からも索引出来るやうに編してある。

要するに索引の業は今日ではまだ未だ十分に進歩せざるもの、むしろ將來の發展に待つべきものがある。本書は新發明の皮韻法によるなど注目すべき新研究を多く含んでゐる。多數の說苑の讀者を益することが大であるのみならず、將來の索引編纂業に教へる所も大であらう。(紹介者 高橋俊乘)

### 寄贈圖書

引得 第一號 說苑引得

燕京大學圖書館編纂 定價〇・八ドル

### 寄贈雜誌新聞

哲學雜誌	昭和六年八月	五三四號
丁酉倫理會講演集	同七月	三四五輯
學校教育	同八月	二一八號

倫理研究	同八月	一五號
社會學徒	同八月	五卷八號
學園日記	同八月	二五號
生理學研究	同七月	八卷七號
奈良縣教育	同八月	二二〇號
願 慧	同八月	十年八號
帝國大學新聞	昭和六年七月二十七日	